

2021年11月7日 礼拝説教要旨

詩編講解説教84「巡礼の旅人」

詩編84：2～8、ヘブライ11：13～16

詩編第84編は分類上「シオンの歌」と呼ばれています。この後の87編、122編なども同じ分類に入ります。シオンとは、具体的には神殿のあるエルサレムを指しています。2節「あなたのいますところ」3節「主の庭」4節「あなたの祭壇」5節「あなたの家」いずれもエルサレムの神殿を指しておりまして、そこで神さまを礼拝することを慕い焦がれる詩人の思いがこの詩には溢れております。

また6節「広い道」7節「嘆きの谷」8節「いよいよ力を増して進み、ついに、シオンにまみえるでしょう」という表現からこの詩人はエルサレムを目指して旅をする旅人であることがわかります。つまりこの詩は巡礼者の歌なのです。巡礼というのは、わたしたちにはあまり聞き慣れない言葉かもしれません。最近アニメなどに出てくる場所などを訪ねることを「聖地巡礼」と言ったりするようですが、本来は宗教的なもので、宗教学的には日常を離れて、聖なるものに近づこうとする行為のことを指します。日本人も例えば四国八十八ヶ所を周るお遍路さんのようなものがあります。イスラム教ではメッカに巡礼するのが有名です。またキリスト教でもカトリックではエルサレムやローマを聖地として巡礼することがあります。ユダヤ教ではエルサレムでも特にかつてのエルサレム神殿の壁、「嘆きの壁」と呼ばれるところが聖地として、この壁に向かってユダヤ教の巡礼者たちが祈りを献げる光景があります。わたしたちプロテスタント教会では、そういう特定の場所を「聖地」とすることに對する抵抗がありますので聖地巡礼はしないのですが、巡礼そのものは否定しておりません。メイフラワー号でアメリカ大陸に渡ったピューリタンのことをピルグリムファーザーズと言いますが、ピルグリムは「巡礼者」という意味です。新しいエルサレムを目指して彼らは新大陸アメリカに渡ったのでしょう。

何より巡礼というのは、聖書にその根拠があります。この詩編もそうですが、例えば、創世記にあります神さまが示す地に向かって旅立つアブラハムの物語、またイスラエルの民が約束の地カナンを目指して旅をする出エジプトの物語も一つの巡礼の旅と捉えてよいでしょう。またルカ福音書に少年イエスの話がありますが、過越祭には毎年エルサレムへ旅をしたこと、イエスが12歳の時に祭の慣習に従ってエルサレムに行ったことが記されています。これは律法で規定されておりまして、主イエスも律法に従って巡礼の旅をしたのです。

巡礼には目的地があります。「ついにシオンで神にまみえるでしょう」（8節）神殿で神さまを礼拝する。そこに巡礼の目的があります。そう考えますと、わたしたちの一週間の生活もまた巡礼の旅と捉えてよいでしょう。日曜日の礼拝に向かってわたしたちはこの世を旅しています。今、このコロナ禍で礼拝に来られない方々も多くおります。あるいは年老いて、あるいは病のために礼拝に来ることができない。そういう人たちはこの詩人の礼拝を慕う気持ちが手に取るようにわかるのではないのでしょうか。この巡礼の旅路があまりにも長いのです。それゆえに「主の庭を慕って、わたしの魂は絶え入りそうです」（3節）とあります。魂、その存在の中心がやつれはててしまう。わたしたちはそのことを想像することができるのでしょうか。礼拝に来られないということはそういうことなのです。わたしたちが今このように、何の妨げもなく礼拝に来られることがいかに幸いなことか。これは決して当たり前のことではありません。この幸いを改めて覚える必要があります。

またこのように巡礼の目的地が遠いと感じることは、老いとか病とか目に見える要因だけではありません。この一週間の生活を振り返るだけでも、わたしたちは数え切れないほどの過ち、罪を重ねてまいりました。神さまに背いて生きて来たのです。そのようなわたしたちが神さまとまみえる相応しさがあるかと言ったらないと言わなければなりません。それでもわたしたちはここに招かれ、神さまを礼拝するのです。それはわたしたちの巡礼の旅を助け、導いてくださるお方がおられるからです。わたしたちは一人でこの旅を続けるものではありません。主が共に歩んでくださる。主がこの巡礼の旅の同伴者となってくださるのです。主は「人の子には枕する所もない」(マタイ8:20)と言われました。主ご自身が旅人であられ巡礼者であられた。あのエマオに向かって旅する弟子たちと共に歩んでくださったように、わたしたちの罪のために十字架で死んで、三日目によみがえられた主が、わたしたちの巡礼の旅を導き、ついに神さまにまみえることができるようにしてくださったのです。だからわたしたちは今日ここにいます。この幸いを噛み締めながら毎週の礼拝をまもりたいものです。

そしてこのことは、それぞれの人生の旅路にも当てはまることです。わたしたちの人生は死んでおしまいではありません。死で終わる人生ならどんなに悲しいことでしょう。今日はヘブライ人への手紙を読みました。「神は、彼らのために都を準備されていた」(11:16)とあります。そこは天の都、まさに神さまにまみえる場所がこの人生の最後に用意されているのです。今日はこの後、在天者記念会があります。この日にこの詩編の御言葉が与えられたことに深い神さまの導きを思います。「ついにシオンで神にまみえるでしょう」(8節) この御言葉の通り、天に召された方々は巡礼の旅を終え、今、神さまの御前にあって、神さまを礼拝している。わたしたちよりもっと近くで神さまにまみえている。わたしたちはそのことを信じているのです。

何よりそのために、イエス・キリストがご自分の命を代償にして、天の都を備えてくださいました。わたしたちが自分で用意するものではありません。わたしたちは最後どうなるのか悩む必要はないのです。神さまが天の都を準備して、わたしたちを迎えてくださる。主は言われました。「わたしの父の家には住む所がたくさんある。あなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える」(ヨハネ14:2-3)と。こんなにも心強いことがあるのでしょうか。「いかに幸いなことでしょう。あなたによって勇気を出し、心に広い道を見ている人は、嘆きの谷を通るときも、そこを泉とするでしょう。雨も降り、祝福で覆ってくれるでしょう」(6-7節) 主ご自身が「広い道」(6節)となられ、「泉」(7節)となられて、わたしたちの困難な旅路を導いてくださいます。勇気を出して巡礼の旅を続けていきましょう。